



めいおんの会



大学に吹く新しい風

名古屋音楽大学教授 音楽学部長 橋本真介

自身名音大の常勤教員になって、早9年目の秋を迎えました。思い起こせば、音大在学中にプロオケに入団し、ベテラン団員に交じた若造の私が何とかスタートしたオーケストラ生活でしたが、様々な人の助けも借りながら27年間、常に多くの聴衆の前で演奏していた頃がとても懐かしく思えてきます。

職業音楽家になることは、ごく一部の限られた人のみがなることのできる職業だからこそ憧れは強くなるものの、現実の世界は中々そう甘くはないということ。実力の世界はもちろん、それを成功するには人との繋がりや運も関係してくることもあるでしょう。名音大の生徒の中には高い志を持ち、その世界の扉をノックする者もここ数年増えてきています。彼ら彼女らの持てる力を全て発揮できるよう様々なアドバイスをし、力強く夢に向かって努力できるようサポートしています。おそらくほとんどの大学担当教員は親御さんと同じくらい、いやそれ以上に「あなたは将来、何者(どういった職業)になりたいの?」と聞くことがあるでしょう。それぞれで色々な夢が広がる会話がなされていて、それに向かい一緒に頑張っていることでしょう。

さて名音大では将来の音楽家になるべく可能性を広げようと、今年度より中部地区初の指揮コースを新設しました。このコースは2つの専攻を選択できるようになっていて、一つはプロの指揮者を目指す学生対象で4年間を通じ、オーケストラの指揮法を中心に学び、各種コンクールに参加するなど、高い専門性を学ぶプロフェッショナル専攻、もう一つは学校現場、愛好家団体の吹奏楽、オーケストラ、合唱の指導者を職業として目標にする学生を対象とし、4年間を通じて集中的に指揮法と指導法について学ぶ指導者専攻です。中学高校の教員から必要性が叫ばれてきた働き方改革により、教員の長時間労働の温床となっていた部活動。これに関して動き出したこれからの時代、必要とされるであろう人材を育てていくのも大学の役目でもあります。名音大のオープンキャンパスの指揮体験レッスンでは興味や夢を持って参加する高校生もいます。

また来年2025年4月より「メディアサウンドデザインコース(MSDコース)」を新設します。このコースでは、ゲームやアニメ業界、イマーシブオーディオ(3Dオーディオ)などにおいて求められる最先端の技術やスキルを学ぶことができます。テクノロジーを駆使し「音」をオリジナルにデザイン、音大ならではのクリエイティブな学びを展開し、現代のニーズに応えます。同じ学園でもある名古屋造形大学との積極的なコラボレーションと共同プロジェクトにより、音・光・映像の合同作品を創りあげるなど、「めいおん」ならではの授業を展開しようとしています。

またそれぞれのコースでこういった専門技術や座学を学ぶことは勿論ですが、人との協調性を重んじコミュニケーションを大事にして仲間意識を高めることが大事だと思っています。大学4年間の友は一生の友でもありますし、社会に出てもそれは同じです。私も楽団員だった時代に音楽を通じて出会った多くのプレイヤー、中学高校の先生方、生徒達、お客様との繋がりは大学教員になった今でも大きな心の支えとなっています。

最後に、この春から学長も長年務められた佐藤恵子先生から新たに清水皇樹先生に代わり、また大学では新しい風が吹き、時代の波に乗り大学も大きく変わろうとしています。

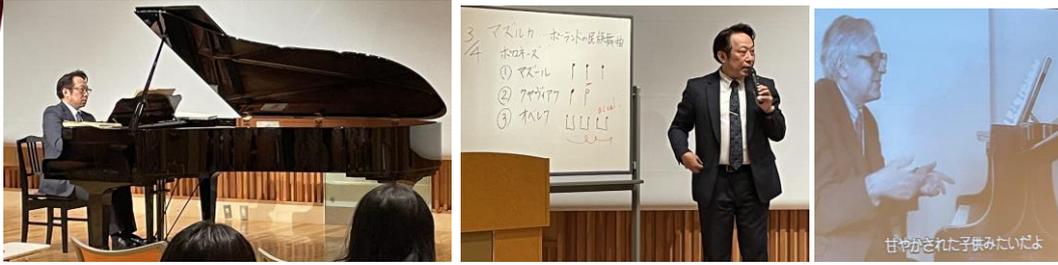
卒業生の皆様にとっても誇りある母校として、躍進し続ける名古屋音楽大学を築きたいと思っています。大学主催演奏会では1年を通じて様々な想いをを持った学生達の高いレベルでの演奏会を聴くことができます。

どうぞ足をお運び頂き、後輩たちの演奏を応援いただけますと幸いです。



「ピアノとともに」

名古屋音楽大学 学長清水皇樹先生をお迎えして



清水先生は「生涯、最も影響を受けた恩師」として、モスクワ音楽院留学中に師事したレフ・ナウモフ氏のレッスンの様子を語っていただきました。

ナウモフ氏は指導力、人望ともに絶大な指導者で、門下からは国際コンクールの入賞者を多数輩出しています。彼が継承したネウガウス(ナウモフ氏の師)の流派には20世紀を代表するピアニストのS.リヒテルやE.ギレリスも属していました。ナウモフ氏のレッスンは厳しく、次のような状況ではレッスンをしてもらえなかったそうです。

・遅刻をする ・暗譜をしてない ・ミスタッチがある ・演奏から感性を感じない

特に「感性」については奥が深いものでした。ナウモフ氏から奏法の指導は一切無く、演奏者が自身の解釈で演奏後、氏の琴線に触れたときのみ、「なぜそのように演奏したか」を問われ、レッスンが始まったそうです。清水先生は「二つの音をレガートでつなげる」だけなのに、何回弾いてもナウモフ氏にはレガートに聴こえず、そのままレッスンを終えてしまったことや、わずかに1フレーズの演奏に1時間以上を要したことなど、ご自身が苦勞されたエピソードを懐かしそうに語っていただきました。また、ピアノソナタ「熱情」を弾き終えた人に「あなた自身から熱情を感じない。私の前で2度と弾かないように」と伝えたというエピソードは、感性を研ぎ澄ますナウモフ氏の人柄がよく表れているように感じました。

後半はショパンのマズルカを取り上げ、3拍子のリズムの中に譜面には無い「微妙な間」があること、それがその都度変化し、そこに演奏者の「センス」が表れるということ、実際の演奏を通して教

第1部

えていただきました。ピアノの音色の美しさに思わず聴き入ってしまうすばらしい演奏でした。清水先生は「ナウモフ氏から学んだことを日本で伝えなくては」という思いをずっと大切にされているそうです。実際、ナウモフ氏が私たちの目の前に存在しているかのように感じた講演でした。

「情報交換会」



第2部は情報交換会を行いました。

最初に参加者全員の近況報告を行ったことで、各地域の様子がよく分かり和やかな雰囲気になりました。近況報告の話題から、普段の授業や学級経営における悩み、中学校の部活動や特別支援教育の現状、特色のある授業などについて一緒に考えることができました。中でも「話を聞かない小学生」については、共感する参加者が多く、「教師の説明を端的にする」「基本的な指示は、教師の肉声ではなくパターン化した楽器の音色で伝える」「リコーダーの練習で口をふさぐ」など、日頃の対策が紹介されました。また、中学校の部活動で活動時間の減少に伴う部員や顧問の意識の低下を心配する声がかげられました。特色のある授業では、「卒業の歌」を創作した中学校の事例が紹介されました。参加者は手立てや主体的に取り組む生徒の様子に興味をもち、充実した会になりました。

第2部